

理学部での授業評価アンケートの活用事情

理学部

竹内 照雄

1. 理学部教育改善アンケートの歩み

平成3年(1991年)6月大学設置基準等の諸基準の改正(大学教育の大綱化)に伴い、教養部廃止と教養改革・カリキュラム改革の動きが全国的に広がった。新潟大学でも平成5年度より新カリキュラムに移行、平成6年度教養部廃止が実施された。この大綱化の中で一連の教育改善の取組み(自己評価、FD、授業評価、GPAなど)が行われるようになった。

教養教育については大学教育開発研究センターが中心になって授業評価アンケートを行った。理学部でも、平成5年度新カリキュラムが実施されて以来、種々の学生アンケートによる教育改善の取組みを行ってきた。平成6年、平成7年度、理学部では1年生に対して教育アンケートを実施し、分析を行っている。これは科目ごとのアンケートではなく、教育カリキュラム全体について一つのアンケートである。また平成7年度、平成8年度には卒業学生向けアンケートを実施し、新旧カリキュラム比較を行っている。

平成13年度より理学部では各開講科目に対して個別アンケートを実施し、担当教員への提示とその分析を行っている。13年度、14年度、15年度分は報告書、平成16年度分はホームページによる公開を行った。

平成18年度より、全学での授業評価アンケート実施に伴い、理学部独自アンケートを廃止し、全学での授業評価アンケートへ移行した。

2. アンケート内容と活用段階

上記アンケートの活用方法は以下の段階に分けられる。

- ① カリキュラムについての全体的アンケート(平成6年度～平成9年度)
1年生向けアンケート、4年生向けアンケート：カリキュラム全体としての評価
(・教養科目の各科目授業評価アンケート(平成7年度～))
- ② 理学部による科目ごとアンケート(平成13年度～平成16年度)
科目アンケートの実施と周知、分析・コメントの依頼
- ③ 全学による科目アンケートの実施(平成18年度～現在)

平成18年度～：自己評価と学科による評価のホームページ公開

①では、個々の授業評価ではなく、新カリキュラムの全体的な検討を主としたもので、個々の科目の改善を目指すものではなかった。結果は教育改善検討委員が主として分析し、各教員に周知した。しかし、この取組みが行われる中で、教員間での教育改善の意識の深まりがあり、当然のこととして、各科目・授業の改善の取組みが各学科・各教員で行われてきた。その結果の共有がFD活動であった。理学部では平成10年3月～12月「理学部の教育に関する討論会」を7回開催し、各教科での取組みの成果を共有した。

その成果の継続として、②へと進んだ。当時教養科目については各科目アンケートが実施されていたが、理学部でも理学部開講科目すべてを対象とする評価アンケートを実施することにした。これは、各教員の取組みの学生評価を通しての検証の意味もあった。この各授業での評価結果は、各教員へ示され、分析・コメントが依頼された。その結果を学科毎にまとめ、学科としての纏めが作成された。この取組みを通して、授業改善の方向性が周知されるようになった。平成16年度の集計データはホームページで公開を行った。

②の取組みは理学部としてのものであり、特別な活動としての意識が強かったが、③に移行するにつれて、授業評価アンケートを見て、その分析を行うことが、日常化してきた。学生側からも、アンケート慣れの意見「アンケートを行って何がかわるのか。」のような発言も聞こえるようになった。

3. 授業アンケートの成果と課題

平成5年度以降、教育改革の流れから、種々の方法で教育改善活動を行ってきた。授業アンケートはその中で、最も具体的で目に見える活動であり、かなりの力を注いで行っている。これに関連して、「約15年にも渡る活動の成果は何であったのか。続ける意味は何なのか。」等種々問われてきたのも事実である。これに対して、以下に私見を述べる。

この間の取組みの成果：

- ・授業アンケートが普通のこととして受け入れられるようになった。
- ・授業アンケートの評価項目について一定のコンセン

サスが得られた。

- ・授業アンケートの評価を上げる努力を各教員がするようになった。

この結果、実際、主な評価項目について、理学系では全体として評価が上がっている。特に評価がかなり上がっている教員も多い。一方で、余り変わらない教員もいる。他方、最近授業の実質化が言われるようになり、授業の質と評価の相反を指摘する声もある。

- ・問題点：次が指摘されている。
- ・現実的取組み方に個人差があり、それによる効果も個人差が大きい。
- ・教員の努力では上がらない項目がある。
- ・授業の達成度を上げようとする、評価が下がる項

目がある。

アンケートが一般化した現在、次のステップに進む必要があるだろう。その際、アンケートの目的（良い授業の構築）を再確認する必要がある。更に、「授業の質は学生の評価からでは決まらない」こと、また「授業の質は教員の主張からでも決まらない。」ことを考慮する必要がある。従って、これ以外の指標の導入し、それらと組み合わせることにより、より良い授業の質の確認を行うべきであろう。

新たに第3の評価指標を導入し、第1の指標（学生による授業評価）、第2の指標（教員による自己評価）と総合し授業を評価すべきではないだろうか。